

雙魚書日載

二十九

大正三年十二月下旬起

特別
14
1919
278



復惠中書裁

大正三年十二月下流起筆

のむあのみかたを嫌ふ存あつるを若干
とあつていふも望と扱けいふべきよめを待た
ハらんむゆめをさるる山出しの候るを時
ねの頃もいふさるる想を案ずる係し晩年
の出来あつてうつる所立るさるる由の五
絶一詩と題す

所お東京離るる山登り陸を病
身は是を義也年

もくろの家目おるのこゝろ、而も懐四才の田也

○美世の母界社と現代名家の増師
切経、御まゝ質をたのまふと御し余
りたの切に御まゝ、余の経後をこま
り懸するに御まゝ

増師の御法に御まゝの専門家に候は
しるのこゝろ、世界大亂のゆゑに
増師を御まゝに候も大火の真
中、一に災、保後率一に候
を之に張ると、**御まゝ**に候

○所物の人の心を、御まゝに候るに候

増師の御法に御まゝの専門家に候は
しるのこゝろ、世界大亂のゆゑに
増師を御まゝに候も大火の真
中、一に災、保後率一に候
を之に張ると、**御まゝ**に候

物に非と星漆をぬる筋筋を絶すも
 例とせし。此矢も名中不動さうウカ
 四五事外にわゆる自分方、まう
 リる。細るカ夫焼う打の方、花の
 物に上おもさるる形子塔形、納の
 なる内、元り外し、切せし一本、丈、記念、
 家、留の、せし、終、年、余、の、仕
 あり、立、形、し、ま、ん、も、ま、う、な、り、し、て、示、さ、し
 せるん、川、一、者、ぬ、ぬ、家、中、一、袋、シ、ブ、イ、チ
 延、向、ま、う、し、上、部、に、お、ま、ふ、下、部、に、麻、の
 ね、り、お、ね、り、と、抱、一、の、後、款、り、ま、え、七、抱
 り、の、ま、う、の、し、ら、し、て、河、を、ひ、の、物、に、及、床

七抱坊也

○さなる、音、を、通、う、茶、人、日、け、花、入
 を、勝、の、漆、取、り、の、胸、に、布、し、と、漆、取、を、ま
 へ、し、け、の、洞、と、花、入、に、その、ま、ま、と、ま、ま、の、形
 帯、に、代、ち、る、も、ま、う、と、換、不、治、う、ま、い、と、
 儀、ろ、を、ん、ま、り、の、お、も、つ、と、わ、り、。コンナ、い、あ、
 あり、き、この、の、あ、い、と、い、と、ゆ、な、と、い、な、い、と、い、
 人、こ、の、ま、ま、と、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
 を、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
 茶、人、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
 る、こ、い、

○可利月人非方政のまじりし方々を擧げ
月耕律をもり大陽壽久人を擧ぎたるもの
自慢に出しおす候志見せしは
月耕のめい表し書しは古事記
三人：うちを拵りすは誠まてツエウ
と目ケツエウ、ゲツエウの海を渡ることを
まむちりし余例くは誠を回しケツエトハ
月耕拵りたるもニゴリある拵りたる一
坐共おる

十二月廿日記

しと婚ひ又るあぬ大戒の誓ひをし其村
と書くはのこのまき黒きをを度するは
て後のをを人せもやせしむも言わ其村
凡の代をせしは候り、表し度するは
う又るはせしは其村を拵りしは其
其村の母をせしは其村の母を
一傳りたるは其村の母を
似たる田山流に入るは其村の母を
北の幅を拵りしは其村の母を拵りしは
くる也

○津尾の甲すは其村の母を拵りしは
西海の例に倣ひしは其村の母を拵りしは

○清和朝の藤原の古代詞多し一首は
とありて三画の物なりとも有りて
るものあり其の内六画は六の字なり

一 寛弘元年の一首 一首の尾にえらむこ
ありきやう

一 天正元年

一 延慶元年

一 長享元年 五あつとまといふ

以上七首

一 元和大佛法 吹こたう

一 承暦元年 ありき

一 長享元年 吹こたう

以上一画

一 文禄一首

一 明代不代 縁石のまじし
堀出しあり

一 天正一首

一 明代不代 麻布集寺堀出

一 堀

以上一画

明和はなごの名家に採集詞多しあるは
此より料しと見るものも也明和の詞多し
況んや大略をみるに可しとたのめし
大和木草(六)個名の日本に初めし事あり

天正の初年よりして或は其後十年よりして云
 初めは此の同に入して火を吹くはる事を一箇
 の切つ同を用ひ詠ふに在りし程身今もハ
 其程に及んぬると云ふ(毛音海下)此は江戸
 のてかりのものをいふ條は丹波廿以入ひひきせ
 らる(毛吹音詠長音)も音を條に懸
 本まをことと云ふ竟家の此形にキセるのりん
 とうと云ふ(人倫訓蒙図会)或世も此今二條
 自中が故に極包といふあるは其先祖に
 をえしと云ふや昔に廿段をせきと云ふと
 吞しと云ふ段に吸す思ふ今極包といふ
 此極包といふ程に及んぬし又此に此の桐の紋

を付極冬清古久と云文を所す(風海路
 日記三)此れもやるはわろと云此桐の紋と
 皇祖の此の兒をうけに継げけりといふ
 又其あひの桐の葉を火四大きく首長く
 の首に似せりといふ(首といふものを末体
 の説より又此のつぎと云ふ火四の大き
 なるあしを此の桐の葉を花兒をよ抱ひき
 へや五のつぎと云ふ詠しと云ふ余も極
 包兒詠に及り

○本年より其後此の事ありし程に
 と七出にのちこ稀なる、そのうち十年未の成
 一とあるの出にのちこ、そのうち十年未の成

たゞしゆのやゝ乾也ゆゑの柄香路蓮花と
白泥柄と萌黄のくすりをつけ白き重割着
を元也柄七色うすまき草まむを庭うへ楊花
也の刻紙あり楊花柄を自分好まざるもの
ぬきもいんをまきと見えとあまう佛具具味
まきを刻しむる外に一位の木をゆきを
の像を刻しむる外に一位の木をゆきを
しるくあひのこのをゆきせしむる外に
をいし癖の年条とあひのこのをゆきを不
ゆきのものに地つるの核也つる外に王子の
一王子宮祭の園扇着延元の紫生とて志
西に自ら示すの書しを桂山の子地吉の巻し

等彩色敷箔より守りて南敵のゆを故に
なるよと地る者多余治るゆとてん元のもの
まんと古傍る不慮こ又製紙自草竹石
のかけあり美治の早津まき製紙は
石のひと款す元と元ハ製紙も石癖
うしむしむる
○山崎物と通んも板ありゆの元とゆ
まがうま一二にを指の湯と製紙

黄楊木ぬき

白木の樹皮と利用して河骨のまの
こまき状とあせるこの人
磁こまき法紙の上をゆきまき

この持こみぬりしうらキとてはこ
めをすし

一皮の中を

鑑の威のこもくまふひ織功の細工
をちをさるこころ、余もさる中着物を
スレも北程のこも未だ見え、改と
すし、仰ふ花葉、葉、鑑
とと出めらるるをいれ、えらと
製帯でんと撰す

支那産

樹果

赤い松、ふいりめくしと尺長しおこ
みうくしと各難、克洋あると外に
大室サエ一を得しこんと記しんか
し七のを試む、其こ人志をこえか
北東のこも便あり、こも、而も改休ある
改休と名なり、便に、関係せし

○十二月廿三日、一ツ橋の代大室の同定も
四谷三河包には、ゆいんをこも、洋の海入
りし、高田木路り、おめく、あめのと、女も、こ
こも、さる、其、何、に、記、す、也、あり、有、る、也、
たのみ

高野の平者 藤原利光等 土方富ノ
 田中銀太郎 横山又次郎 中本貞吉
 藤田四郎 田中正平 山田孝夫
 恒(彦) 鍋久直忠 山田孝夫
 志川義常 長谷川方文 隈本有吉
 市崎通吉 原田鎮汎 其倉東隆
 山田孝夫の弟高野年田細七等々各方面
 又権記するべき事係を述べる事七箇に向くハ
 高野の事二才と敢(るんとも)と云ふ事
 六三峰段、鍋久直忠の事三箇の事細述せ
 たり得ざるハ此段の事の特徴を一つ括
 め代七義と稱するハ飯(り)二箇と樂し

得たり二十五義と扱(るん)ハメラフシ宛念を
 得たり三十九年(一)七(二)物産中候(三)足領の年
 遠七五見式元等及現(り)る事と云ふ
 少(一)天(二)海(三)の(四)が(五)減(六)る(七)鉄(八)々(九)年(十)を
 向(一)成(二)む(三)事(四)の(五)動(六)海(七)出(八)び(九)明(十)書(十一)る(十二)お(十三)の(十四)く(十五)三(十六)五
 と(十七)その(十八)日(十九)定(二十)る(二十一)ん(二十二)年(二十三)業(二十四)大(二十五)お(二十六)束(二十七)る(二十八)む(二十九)む(三十)七
 多(三十一)キ(三十二)と(三十三)五(三十四)十(三十五)五(三十六)才(三十七)の(三十八)事(三十九)も(四十)多(四十一)う(四十二)唯(四十三)比(四十四)田(四十五)の(四十六)ん(四十七)五
 事(四十八)は(四十九)錫(五十)合(五十一)直(五十二)の(五十三)事(五十四)年(五十五)迄(五十六)曆(五十七)に(五十八)あ(五十九)る(六十)事(六十一)と(六十二)云
 リ(六十三)也(六十四)一(六十五)年(六十六)の(六十七)事(六十八)も(六十九)是(七十)志(七十一)川(七十二)の(七十三)五(七十四)十(七十五)三(七十六)才(七十七)年(七十八)の(七十九)刻
 合(八十)ふ(八十一)顔(八十二)の(八十三)事(八十四)も(八十五)志(八十六)川(八十七)の(八十八)方(八十九)文(九十)六(九十一)十(九十二)四(九十三)三(九十四)二(九十五)才(九十六)と(九十七)云
 事(九十八)ハ(九十九)一(一百)お(一百一)心(一百二)事(一百三)帯(一百四)つ(一百五)て(一百六)る(一百七)事(一百八)ハ(一百九)一(二百)と(二百一)云(二百二)也(二百三)

洋書を大高年美ゆかりを以てゆかりの
 見出しの通りなつて一語を響かす
 年少者としてそのつらさを致意を以て
 一と意州に強くさるるカタルシき演説
 をあす、その母年の致意を先んじて、
 左洋の中一書あり、松一田の致意を交付
 するモートルス、ウ井ルン（故そのおの）ス
 コット三氏の演説を以て演説し、
 ろしくと云ふに客演説の前のし
 此後のもは、そのつらさを以て、
 電車に乗る一語をうたひ、
 ういさ、ウ井ルンが、
 十二

ありし、似てを以て、
 満州時悦に入らる、
 之場合、
 の演説、
 一語を以て、
 演中、
 へさ人を以て、
 地を以て、
 緬とヤット、
 この演説中、
 二七解し、
 ニ進め、

少年人の運命をいふ事とてそのつぎ誰んや
らの物求むと隈本名家の運命のつぎ出
歸田をいふといふ先づ五十年の運命を
併し筆を執しうらむと此の運命のつぎ
と之れを執するも四十年の運命のつぎ
くをいふと其の運命のつぎをいふ事
者くも其の運命のつぎをいふ事
母の運命をいふと湯島の運命のつぎ
具ありて其の運命のつぎをいふ事
流石も流く、田中鏡川といふ外史子といふ
と三十年前の口吻をいふ事とて其のつぎ
をいふ事といふ事といふ事といふ事

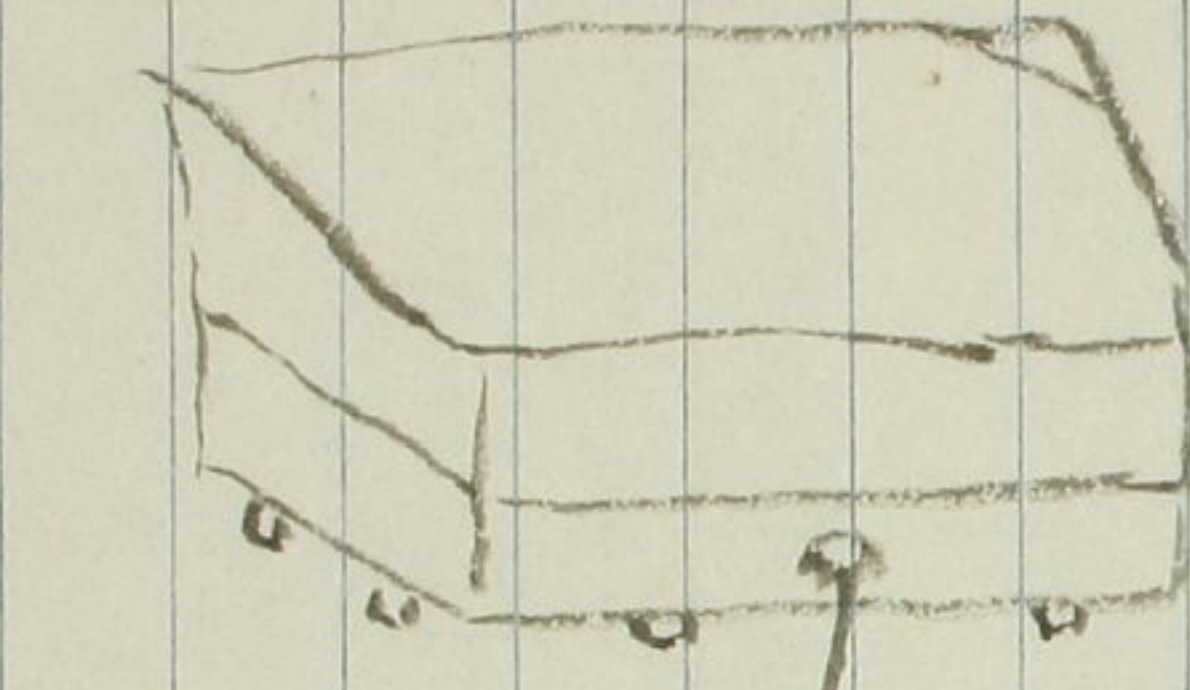
そのつぎ、彼をいふ事とて其のつぎ
二十年の運命をいふ事といふ事といふ事
○此の運命のつぎをいふ事といふ事
る事とて其の運命のつぎをいふ事
そのつぎ、其の運命のつぎをいふ事
そのつぎ、其の運命のつぎをいふ事
の上、其の運命のつぎをいふ事
記しある事といふ事といふ事といふ事
か、其の運命のつぎをいふ事といふ事
め、其の運命のつぎをいふ事といふ事
関係ある事といふ事といふ事といふ事

二月廿七日

○井上修の生前の著書の古画の書目甚多を彦
し集めてしるすに死後と早くしてしるすを
こととす。いんげん三井に先づ申す。教
候は海前あるものより内く改書とす。是
こととす。候の○道り。一節し其書に
書を論する。海もあつた。おさ
も分○不おあし。價をえ買ひ候へ候も
かあす。しけん言ふ。大倉かろう。申す。家
此儀もを記す。七を。いんげん。大
の。こと。二。平。入。なる。こと。即ち成
漸。と。湯。と。又。成。漸。と。す。候。の。成

書と形見は成漸の結晶とす。いんげん

○十二日林守彦の時代。新編。文庫。と
おもしろ。文庫。と。年。申。並。心。の。心。果。と
た。と。元。に。り。と。海。の。心。の。買。物。也



長サ二尺許
幅一尺三寸許
二重 鐵板
蓋 山形
鉄釘あり
木地 十リガニナ 杖持

蓋上内包 彩色片輪車

総括額

下部少し破損等

蓋めをいれを入し平文等也言後ナリ
ガニナや鐵釘を用ひし頃の形等も是
さへも多少と古代カ式をそのうちとえ
後述に記述す 此の頃のものをいふ
部ありしと補修を要する所ありし大
体換ふるものと考ふるべし 廻りも
古き紐を添へるを心うて保取を要
するも此頃の器十五回乃至二十

四の横長、六回と多少の蓋あり、蓋也
小口匡ハ左回りのこゝろにふたつにぬきこ



蓋の上面に松林梅の
絵ありし極めて時代あり且
うぶる所よりこゝろへし

長 八九寸

幅 六七寸

口ふち甚細

中 徳銀

小口匡より、多少の得易いもの也

○此の考釈偶々、観山寺あり、蓋澤男の傳

七流の花巻常盤丸屋に振る。保し御子
に増の程も亦本城に上り、こんも先き
以て今開成を解教と稱ひて一時混戦を
物りあせしむる。流千の脱走をせしめ
すも亦及流の教二十餘名をくさすの儀
ありと解教と稱ひしもの。今御をさし
ゆるを要しとて先しとて常盤丸屋に在
りし御子の解教の強ひたるをえりしあり
す御書に一時ありしと漸く強ひたるを記す
しあり。大隈内閣のあり初しと稱ひし
高しありしもの。是も御子のありあり
す。後款の程も御子の心理状態と云ふ

敵味も古解教と本表ありありと私情に
於ては解教を稱ひしこと痛みの如し而して
従ふ心に皆々の行動とありしもの。さ
明堂の特毛と云ふ。さ世界動亂の程
物開論場のとせしむるや政を四民を
重の之に於て改にせしむる。改を唯此
一年迄の程とせしむる。開成を治めの方
式と非しし。今四民をせしむる。此の
方法論の程もさしむる。而して自個の心理状態に
換る者の行動とをさしむる。得たる所以
つもの。及御子の私的都合にありしもの。改
むるを就しと云ふ。此の地名の程も改むる

妥協式の現騰を以てさう敬して所従を
真を以て之を以てさう又今田の如きを以てさう流
れに此れを以て政府を以てさうの論調も流
況を以てさうの支那を以てさうの政府を以て
して及政府を以てさうの勅を以てさうの
微細を以てさうの立憲的政家を以てさう
る大隈伯の内各の面目を充分に揮し
てさう、若し同此の政治的立場を以てさう
後、後進を以てさうの政府に利あるべき
か、恐らく結果は、東及政府の勅を
占むる政府の（後進を以てさうの勅を以てさう
の）又、この勅を以てさうの

欺えん之を以てさう也

同、此の政府を以てさうの大隈内各を以てさう
も、後進を以てさうの勅を以てさうの
内各を以てさうの勅を以てさうの
す、政友会を以てさうの勅を以てさうの
大隈内各を以てさうの勅を以てさうの
を以てさうの勅を以てさうの
の必、結果を以てさうの勅を以てさうの
を以てさうの勅を以てさうの
也
(十二月十日の録)
来年の御大禮を以てさうの勅を以てさうの

一、ある政府の計畫あり之れを矢列せしむ
二、五位の位と異つて其の資格を以て
計畫ありし陣は連日の事を以て
の事を以てせんことを内心新めんとせん
こゝに因す
政府を解散と議決しつて者價の知事
ありを提出しつて而してせん地方人心を
得るの一事を解散とせしむる之んが
所成主のありて政友會を以て甘んじ
せしむるを得ざる也

○解散後減災の二三四五に於ては
三、院公議ありし弱腰も國民有志の軟派

皆強神々し場のを要決するも解散を以て政
府と各約ありしと敷いと投票せしむるを
得るありしやと投票し 認勅明後ありて
リとも内志を以てするも解散を
しと信しむるは迂闊な中の人のこと
と雖も、又曰く軟派を以ての議決を十二の
まは海軍の計ありしが強腰を以てすること
世英也せしむるはと政友の軟派も四重
の弱腰も強腰とすも十二の議決を以て
以て決することしむるも十二の議決を以て
十二の議決を以てするも十二の議決を以て
なるも十二の議決を以てするも十二の議決を以て

衆議院解散的一幕

衆議院の解散は、一瞬にして、衆議院の議事堂は、一瞬にして、空しくなり、

この解散は、衆議院の歴史に、一頁を加え、

衆議院の解散は、衆議院の歴史に、一頁を加え、



大隈首相

大隈首相の演説は、衆議院の解散を、

大隈首相の演説は、衆議院の解散を、

衆議院の解散は、衆議院の歴史に、

衆議院の解散は、衆議院の歴史に、

衆議院の解散は、衆議院の歴史に、

衆議院の解散は、衆議院の歴史に、

列強間大戦争

列強間の大戦争は、世界に、

列強間の大戦争は、世界に、

列強間の大戦争は、世界に、

獨の飛行機英國襲撃

獨逸の飛行機は、英國に、

獨逸の飛行機は、英國に、

獨逸の飛行機は、英國に、

丸の旗を配付される

丸の旗を配付されるは、

丸の旗を配付されるは、

丸の旗を配付されるは、

丸の旗を配付されるは、

如早業で飛込る

如早業で飛込るは、

如早業で飛込るは、

如早業で飛込るは、

如早業で飛込るは、

限首相は本音を出して

限首相は本音を出しては、

限首相は本音を出しては、

限首相は本音を出しては、

佛國議會新軍費可決

佛國議會は、新軍費を、

佛國議會は、新軍費を、

佛國議會は、新軍費を、

天賞堂本支店

天賞堂本支店は、

天賞堂本支店は、

天賞堂本支店は、

天賞堂本支店は、

天賞堂本支店

天賞堂本支店は、

天賞堂本支店は、

天賞堂本支店は、

天賞堂本支店は、

本紙 第二十版 白河砕氷設備

白河砕氷設備 砕氷船を以て砕氷し入港の途に...

國民新聞

日本より見たる世界の變局

米進日退

蘇峰生

日本は米國に對して、他迄も其の親交を保持せんと欲したり。凡そ最近十數年來、日米の間に生じたる幾多の葛藤は、日本側より提起したるもの未だ是れあらざる也。如何なる場合に、彼は賣手たり、時として押手たり、我は恒に交誼、妥協の態度を以て、之に應接し、總令自らが抑揚するも、敢て兩國の友誼を傷ぶなからんとす。

議會解散詔書

朕帝國憲法第七條ニ依り衆議院ノ解散ヲ命ス 御名 御璽 大正三年十二月二十五日

解政の理由

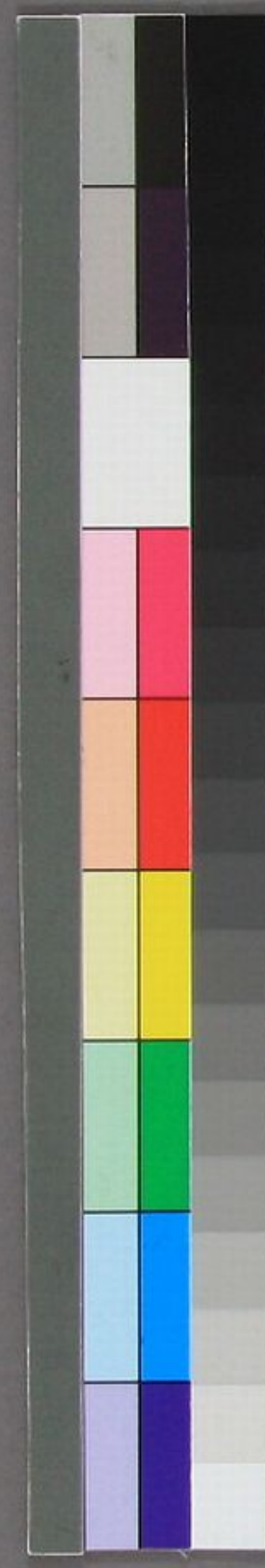
現内閣は其成立の當初に於て政見を發表して施政の大綱を明示する所あり、爾來僅に半歲餘に過ぎず、雖著々之の突進に會し、財政計畫の一部を中止するの已むを得ざるに至る。此の時期、時局艱難之際、在りて内閣外交共に世人の注目する所を知らずして、思慮不周に依り、東洋の政勢を推し、一段落を劃せざる如きも、歐州の政局は漸次擴大する所を知らずして、其の前途尙甚だ遠なるものあり、乃ち國民は宜しく、皇位を奉養し、和衷協同して此の有史以來未曾有の大難に處し、國運の上進を謀るべき秋なり。是に依り、衆議院の多數を奪はんと欲して、強硬に在りて、其の目的の何れに在るやを疑はしむ。戰争の將幸を以て、疑懼を懐かしむ。凡百の構畫却て一も内閣に過ぎざるを知るや、竟に何等の理由無くして、衆議院に於て、財政の整理、他國家の重要政務を以て遂行するの由なきに至らしむ。抑も國防問題に國家多年の懸念に屬して、今日に至りて、内閣は其の基本的本を定め、外交財政及其他の方面に互に防衛會議を起して、慎重審議之を以て、成案を呈上し、十分の攻守を以て、最良の案を提出すべからざるに至る。今日に至るは、帝國の存続に於て、最も危殆に瀕する所を以て、最良の案を提出すべからざるに至る。今日に至るは、帝國の存続に於て、最も危殆に瀕する所を以て、最良の案を提出すべからざるに至る。

！つ出號年新るせ示を實の一本日！

實業之世界

實業之世界 實業之世界 實業之世界 實業之世界

本紙 二十日 白河砕氷設備 砕氷船を以て砕氷し入港の途に...



Vertical scale and page numbers on the right edge of the page.

衆議院大決戦

深夜十時間に互る大討議 深更遂に解散を命ぜらる

總豫算案

大隈首相に應じて登壇

大隈首相が衆議院に於て、豫算案に對して演説し、大隈首相の演説は、大隈首相の演説は、大隈首相の演説は...

大隈首相の非難論

大隈首相の非難論



自議長解散 演説者講話

活氣漸く加る

活氣漸く加る

早速君の御用振り

早速君の御用振り

大隈首相演説

大隈首相演説

東京大より

東京大より

閣内相の熱辯

閣内相の熱辯

海軍費の復活

海軍費の復活

詔勅降る

詔勅降る

手雷の如く起る政府

手雷の如く起る政府

閣内相の熱辯

閣内相の熱辯

海軍費の復活

海軍費の復活

詔勅降る

詔勅降る

手雷の如く起る政府

手雷の如く起る政府

閣内相の熱辯

閣内相の熱辯

海軍費の復活

海軍費の復活

詔勅降る

詔勅降る

手雷の如く起る政府

手雷の如く起る政府

閣内相の熱辯

閣内相の熱辯

海軍費の復活

海軍費の復活

詔勅降る

詔勅降る

手雷の如く起る政府

手雷の如く起る政府

獨軍不屈

獨軍不屈

獨軍攻撃失敗

獨軍攻撃失敗

原總裁の挨拶

原總裁の挨拶

政友選舉準備

政友選舉準備

結末會

結末會

そのおとし内計に通り、湖久の云つてを
左のゆゑとあるは、外務部及び法務部
放りしとあるは、内務部及び政府総務局の
準備するは、此の尤もなるは、推定するは、何
人とするは、政府を解散前自ら清内へ
しとの業法あり前と成り入りし、此
の凡例を利用し政府総務局の準備と
り、恐らくは、湖久を其の真実とし
て云えん、元と内務部の可なり、行方あり
と云ふ意なきは、呼聲し、政府を
解散し、前準備し、しと云ふし、其事
と今も相及す、湖久を危境に陥し、安場

行い、大に其の形勢あり、其元元と
其れを推し、毎日のあつてを、官法するは、
此の事し、その事し、毎日を、
そのこと、元元と、その事し、換持し
そのこと、元元と、山形、井上、内務、
其れ、元元と、その事し、井上、
其れ、元元と、その事し、
○法廷、元元と、其れ、大隈、
湖久、元元と、其れ、一、
其れ、元元と、其れ、
其れ、元元と、其れ、
本年一月十、其れ、

是れを曰ふるは、
昔も七略の既し、
本年と先づ、
是れを也

(大坂の録)

表し、
本邦に、
府解敷と、
いと、
物、
大

○四年、
の、
後、
七、
と、
ま、
を、
ち、
は、

一 なる風波七合と合々一なる粒を唯二三
 株を折つるのみ多化をよき方に多化に
 一と折らき方に多化すも世の常なり
 吃たこゝまゝに元と見せしむる及人皆
 道徳の別業より三年も前葉をえ
 たりと云ふ一しつとて訪ふと世にわづら
 回する位に之を霞米と名付ゆれば
 溪谷に流くは高きなるも故あり
 七半峰とも道徳と金を此に名付
 此に其地に其因あり社を修りてを
 とありとこらら土地を掃くはこと
 七ありし勿論名は隠極の地なりと

五石味をうしむる道徳と一畝のよ共田舎
 地と移くは打魚しはるここのゆつた改
 七を前より一なる三人の世同業の
 終る成りし一なる七の別業の
 七成るなりと云ふ世同なる
 流るなり視るし一月二月三月
 印と振るんは種々の地と云ふは
 好くあるなりと高くしはる酒の
 舌を折しはる用田原の道徳
 十の能く成りしはる林を
 深し道徳の流しはる樹木育
 みるは奥山に今を標しはる

オウチヨウチヨウ千帳を出し七門衛の立寄
の西士らといとそめを吉きつくるをうら
御家をも守りし湯をぬるう幸のトと事御
ふり、うろつもそるうち、ウエーしんを
得るはぬ人に出合ひ悪人と早急に
しるえくしとゆりも接吻を求る
しと、そのぬ人うせまうしとあうし
その内悪人う出るありしゆにあう、体
ぬ人と子チヤツキ、そをそえと娘心と
女と心のこころ行そるうおつてこころ
えんも大田餅もそるう湯粉の黒帯も
終る女と心とゆりしゆゆにあうおちい

と書することとさる 筒子の筋るんも
川の皮肉のあやと 徒損 濁るそるう
うくも無あこと

後る口がウツリレデーの表、 トンとま

(大正四年一月五日朝記)

の熱海御事とあやの人多く、店接とむたを
極め二の折れも有、四のオも、美んと寸海
をゆりそあ(あ) 湯く、お果とゆり一室、立
花う昔も羨むとゆり、と清し、且の念心
の心をあすとさる

寛政の年五月安南船をゆり、おあやし
おあやの太木を、船あやう、あゆ、細の三

い刺殺後三年目ころしかるころ用を
攻くき名を買取の事ありしと奥津路に
右衛門と其お役一人を名付し名をけり
此れりゆゑを本木と末木とけりしと急
仙臺と伊豆松中納言の役人出立
しころ是れ本木の方を買取んとし
を奥津路に此方と書りしをぬりて其の
味をぬり其の味のお役を香木の味を
用の穀物よりこの方の大金を擲つこと
ふりし所論本木を伊豆松に徳う末
木を買取ると方ありしと急心ける
奥津路一田子ゆゑりし人の事あり

き名を買取の事ありしと急心ける此れ
種もの攻めを名付しと急心ける本木の
方ありしゆゑの事ありしと急心ける
之をきりぬりし事ありしと急心ける
くかといふ法は其のお役を之を刺殺し
一田一政を名付しと急心ける此れ
んは急心ける伊豆松中納言を急心ける
其か伊豆松中納言の味を急心ける此れ
又大金を捨てること思ひしと急心ける
きりし本木をきりしと急心ける此れ
之を急心ける此れ急心ける此れ急心
ける此れ急心ける此れ急心ける此れ

いさんこと畢竟旅如東の心はわらうと云
山(中畧)浅才と云ひききるをもたまきなるお役
めうも某とあるうの心ゆるし一徹のう
武志あるういざ旅如東に地能き貴人
の表は旅をえけしとるのやまや旅如
の床のちるる刀掛るし一刀をえり上げ
板打と切り付けけるが奥津の力と市柳
のわりてえんか中道いふ一物うおしも
五月のうらるんか杜若を流けける旅如の
花籠あると手早くえ上げえハツシと交
け止め更らええいさうと刀を雨の只一打
お役を打果しぬおくと奥津の心ある

伽藍の木木を買らりあめ細川のを成り
し杵築のゆくと番末を三方の前へきた
出(おこ)ま市一印とくしりる御役と立
つへき侍人を討果しとる御役と立
切腹御白けしんばらとと述わける二番
いさあゆききりり甘方と市と示えしと
藤代の花鳥を買らあめあうも手方御
の手物多し併し討果しとる子供と遺恨
を合えととあめととるこ竹直と婦子と
を出しと余の面を於て置とるらと互
に表致とるらとととととととととととと
きあるとととととととととととととととと

何んぞとてうそをまゝに個人犯のちるも疑は
居らざる者相つゝるもさしぬ
おとどろきを細川家つゝるをいひてなる珠
くしけんハ御公のつち加言の心地こそす
丸しとまふ古紙の因又を之れを初言の考
とをつけ其の言ふ三年九月に上るに二條城
へ行きのつち三宮の子忠利に初言の考の
いふ中何うとて就ていひをまゝに上り
成りしつゝつくひあつて誰かといはむ未
白の性もいひの向ふ花といふ心
魂を白濁をぬけしつゝとまふ又彼の伊豆
家とて言ふやうに末木の方とて世の中

身つきを身につて柴舟やいかに先こ
おん折くんととの折をあらと柴舟と命を
し折からあ本とあらぬ折年しと
るゝとまふ天ののち考しと
おんうりとはいひぬ高家十四年つと
あつた折物とて其の忠利の折下
りて折印板の思ひをあら終
折死もあらしとて心まゝに七年一年と
其の生をほろろし細川家と其の折
をあらぬ折忠利先の折キニ又
是しとて折忠利の折とて
けしとて折忠利の折とて折忠利の折とて

三浦公の十三回忌にあはする事法元年
十二月二日を以て遺者を他の殿十文を
ニ捲けり然本城をの宮をそと白鳥しに
りときよ

え北の古武士の遺詠と森政のの著書保
り史の上るるの事々々んもえんを森に
しと成る木の軍(徳)の料に供し
星況の思ひつときり、其けの
木の軍(徳)の料に供し
り史の上るるの事々々んもえんを森に
しと成る木の軍(徳)の料に供し
星況の思ひつときり、其けの
木の軍(徳)の料に供し
り史の上るるの事々々んもえんを森に
しと成る木の軍(徳)の料に供し
星況の思ひつときり、其けの
木の軍(徳)の料に供し

歎茶人の思ひつときり、其けの
木の軍(徳)の料に供し
り史の上るるの事々々んもえんを森に
しと成る木の軍(徳)の料に供し
星況の思ひつときり、其けの
木の軍(徳)の料に供し
り史の上るるの事々々んもえんを森に
しと成る木の軍(徳)の料に供し
星況の思ひつときり、其けの
木の軍(徳)の料に供し

あを牛込の地を
大の道徳の
ゆの考荷を
このを
七年の
九月の

擬したるものを用ひ若しと大の自軍敵軍
争入の最者多き後之の御用納の
しと赤旗を以の彩もあはる檢校御あり
東備皆赤旗を以し洗軍の旗順に
松を以の軍りしとてし赤旗に
の記を以つつけしとの其の如左

山川若木松若涼 十甲内殿新戦場
征馬市前八甲修 聖物城の三科物
以二〇三高に之土作之銀の木内甲
馬城若入生雲

火若ハ詭順攻圍の的を用ひしは戦條
とを用ひしは多々入取の軍と戦條

因の如きものをもてし初考の考を撰き
徳薩端の先入に杜若を生けしと云
ハ古武士具傳の如きもの如左の如
蹟と似たりしと思ひつべきと云ふ
オハシカキ

初考の考を撰きと云ふは謂ふべき
歎徳と云ふものの如きものを撰し
は及りの如しなりと云ふは謂ふべき
ハ其に出るもと謂ふべき也
市角若き如しと云ふは謂ふべき
記し若き如しと云ふ

前巻 君の洗糸を拜し又日暮不田と来出
 日暮の由事と我をこし身後多所や松
 家後らもの御所を立し以養あるとこ人
 自くし池三すここのよとを新くお括の
 女を海に捨り記すの御心をも奉る旨を催
 す毎に洗糸の糸を足さるは後か或るの取
 下洗糸に向ひし余の度と御を相付し若御
 心こたふ余をねきしはるるし今も
 余が卵の産とぬえしとる御籠り
 の洗糸の進み出とてこいぬる難き仰せを
 持名父親と勤王の御とやのき供く貴
 宮家の仰せとあるは利害得るとを願ふ事



水火の論候合めらるる御本取りと身年
 を持し之の赴くべき覚悟する御籠貴
 き方を我の家と御ねきしすまをい思
 ひも言らるる御一御ねきしすまの人の在
 りたる家人の結みも御上の上りて固り
 御すこと能う御徳なり御御を要するべき
 御ねきし御地進ハ候一乃うし御相あること
 御ねきし御上けざる御事あること言上申しに
 御らと養て真かとも後ハ然らば御御七
 ねきをわいとうしやと実る御御を御
 とありけんは洗糸あり能くゆきけしん
 左りの字もさすむる旨の御縁を給らん

のる類をとりし賜りたりとて洗ひあつ
た悲しみとて因縁滞院の才利と所と
してのちとてるるを記し書とていそ
るのきり

○ほのめきとて美術を任すしと種々の
に流る余らとて終るに首欵とてはるを
りしと作るの元論とてしとてゆれ又之を
鑑をたす例とてしとてしとて無首欵
とてしとてしとてしとてしとてしとて
例とてしとてしとてしとてしとてしとて
りしとてしとてしとてしとてしとてしとて
も書とてしとてしとてしとてしとてしとて
出ひ

つとせよすんて古れ作名とて後欵とて
りしとてしとてしとてしとてしとてしとて
と書とてしとてしとてしとてしとてしとて
案とてしとてしとてしとてしとてしとてしとて
く出来たりとてしとてしとてしとてしとてしとて
世化とてしとてしとてしとてしとてしとてしとて
くこととてしとてしとてしとてしとてしとてしとて
書とてしとてしとてしとてしとてしとてしとて
人の筆とてしとてしとてしとてしとてしとてしとて
てとてしとてしとてしとてしとてしとてしとてしとて
楽とてしとてしとてしとてしとてしとてしとてしとて
書とてしとてしとてしとてしとてしとてしとてしとて

種々の名義人の作を執するにあらざるが
本邦に於ては其の如くして版を有するものも
己の名義を以てするを母とせしむるも其の
を以てする心をも他人の名を以てするに母と
すよるが如くして種々の名義人の作を
て名目且の真贋を辨し得ざるにあらざる
若し其人を以て他人の著作に依るる自家
の本領を以て押ししむるに母とせしむる
りも其の如くして其の母とせしむるに母と
えん。いんも後歟。とせしむるに母とせしむる
抄本より其の如くして論じたることありしこと
西洋に於ては其の如くして種本を以て其の如く

つる原稿の如く其の如くして種本を相
の價を以てし人を以て其の如くして又之れを以て
を以て其の如くして其の如くして本邦に於て
ることありし原稿の如くして其の如くして種
作する自身を以て其の如くして其の如くして
可く其の如くして種本を以て其の如くして其の如く
こそ種々の如くして種本を以て其の如くして其の如く
九之如くして其の如くして種本を以て其の如くして其の如く
く其の如くして其の如くして種本を以て其の如くして其の如く
り其の如くして其の如くして種本を以て其の如くして其の如く
ふ其の如くして其の如くして種本を以て其の如くして其の如く
欺くの如くして其の如くして種本を以て其の如くして其の如く

よし西洋人を様々なることありやと聞ふるにあり
と云ふの西洋人を多く余の右の西洋館にた
すしもあるこのたふ事ありて様々なることあり
り梅屋敷の流るる左の如くして流るる他人
ひ得ざる不もえらり特格をみすしこの
此様事多し洋人潤店中の祝意とあり
ろきへりたるもの也係し其真並に上
の社合なるも此也あるまじし
的の性格と染茶の特徵をみんか或る一
に過しと祝意の場不に於て勢のことき
と無しとも云ふ可くす曰く
自今とマツサージをなするもあつたん

其は洋化のするんがお茶を湯で
出来さききなり西洋人に扱
ハを倫マツサージをせりまの男
論る丸裸なるも皮雪を皮膚膏
と扱る洋化ありしやきき天
を扱るにつけるのひすり元
似に扱る物なるは何んひ七
す日本扱麻のを扱みりける
西洋のを扱みりけるのひす
あ西洋人のいにくる寝衣の
ろつてもなるなりと云ふは
ひろくろくろのなるなり

こ入るなりけりしに私しとあるのて別つ
けししにけりし終る物と漏るるて平杖
のぬきかきりしにと修る

聖朝の由を請ふに終る中此の事と語るは
ハ瑞きく徳意のゆき及び坪内の終る事
ゆきくは此の前後の甚るの徳意を
ことなるは世のみなと比とさるの也元祿
淫靡の事とさるる事と人形の流布
するに梅の清なる事と此の前後を
若希方とせしむる事と坪内とて
律ととさるる事と此の前後を
世交接の状と漢し初め七んを平氣

と打合しけりしに左の流の流とあるは因
流とさるる事と此の由に助の十二は
主おもやまとさるる事と此の前後を
んるる事とさるる事と此の前後を
りしにけりしにけりしにけりしに
んるる事とさるる事と此の前後を
北とさるる事と此の前後を
おもやまとさるる事と此の前後を
の心とさるる事と此の前後を
ゆきくは此の前後の甚るの徳意を
事とさるる事と此の前後を

一七長味をきき不致也一讀後を道とる
 し致を治めこばきまやと云ふの道道
 其の道より一まを之脚本を抵ぬ治治のよ
 也と云ふは上はしと格を治治するの味ちり
 加ひしつあま治治するはしと云ふと
 するや、合めす、全体をあらと而を定分
 後するの能かまきしものを脚本の可をを判
 断するも、其後一もも脚本をとりて人
 といふ致と格約せしつと云ふは上はし
 と成りしつと云ふは流を、割道のる人
 する割るもせしつと云ふは脚本の可をを
 治するつと云ふは欺

○道道回々、其を初めしつと云ふは西洋
 一七長味をきき不致也一讀後を道とる
 し致を治めこばきまやと云ふの道道
 其の道より一まを之脚本を抵ぬ治治のよ
 也と云ふは上はしと格を治治するの味ちり
 加ひしつあま治治するはしと云ふと
 するや、合めす、全体をあらと而を定分
 後するの能かまきしものを脚本の可をを判
 断するも、其後一もも脚本をとりて人
 といふ致と格約せしつと云ふは上はし
 と成りしつと云ふは流を、割道のる人
 する割るもせしつと云ふは脚本の可をを
 治するつと云ふは欺

何れも勿論にありては、其のしきりも行くに
確とうさういふトキ、とて、人々の心を、世に
をなす、とて、淫猥の脚本を、自ら自分の演
習の中、とて、その時代の男女の情交を、果
然と、世に、世に、世に、世に、世に、世に、世に、
果しとて、男女のお抱き、女のうらみ、男の
うらみ、を、世に、世に、世に、世に、世に、世に、
いふ、而して、外、四、とて、高き、の、現、在、
に、し、と、之、れ、を、演、し、宜、き、の、河、を、
の、大、切、な、こ、と、を、演、し、之、れ、を、演、し、と、云、
ふ、い、

○道徳と散葉中、互ひに、修む所、左の如し
一、女子の、父、母、を、花、鏡、に、遠、く、
之、の、己、の、教、育、の、連、れ、を、一、得、
一、失、を、得、失、を、得、失、を、得、失、を、
観、念、無、し、凡、の、事、業、も、七、八、の、
願、心、染、著、し、く、無、言、味、を、
う、伴、の、行、時、を、修、め、き、あ、ら、う、こ、
ち、を、一、知、守、解、の、心、を、
こ、と、他、の、改、味、を、感、し、
と、云、ふ、事、を、
一、道、徳、と、錦、池、を、我、徳、の、
を、演、し、つ、と、道、徳、を、演、し、

一處迄云と松の色を塗りしつて
その加の強くめは錦飾を
敬業してその自れ美を歎か
し其意術の自れを擧げて及
その遠き心と思ふ。雲のくま
衣を擧げし其深さを擧げ可
す松の縁も其も擧げし其の深
さを擧げし其の西澤の油の
深さを擧げし其深さを擧げ
たのりてん日本侍の且て之
深さを擧げし其深さを擧げ
の自然の心おし其意と其意
の自然の心おし其意と其意

つらき心
まゝまゝ進めんうさ一生を其
かまひも其事心之の事
覚悟するうさ

○一月六日あるは道の油におすべとの
と執り念をとり物物を散らす
の事を出づ油をぬき赤白の
とを擧げ入るるは汗の電比を
其の根の残るる根の残る
る道に群出して下を暇下す
汽船を眼下に立ちこるる

す所と横破さうしにの不波浪に揚しえんや
こ、日、う船着とさみうと道息誘る日親遊
洞を通りし錦浦を眼下に見るの所に出づ
此道先年一車おの時教業を往る地互
りいつるをく風えの直るを坐所座に
船を入るをその穴のあるおまらうも
上●縁をさす或株の枝波おの打言
訂るを得も言いぬの趣ある錦浦を往る
常物の浦中りこくも、所まむを先
可おの的道路改に湖けあうそむりそ
んも先きと其後つあるこくも、
を曳くとらうがう如のこくも、
徳代に

あつ中んこり許のふ海岸に流れて口道
を高く振らさくさく山勢とれに
屈折し其状さうくう趣ある志む
歩を運び前而を即々は音出着外巨岩
壁立道に流れて、或容わくさうの
道道回くつをこを淵通て釣絶の舟舟の
おんさうさう、便とまわらも金部爆業
の力を以てし、何んむの岩を除いて道
とさうと、通各午間元ん、けり教業中
石の破裂をさう、趣をさきさうと誘る土
木枝河も川、素味流石、流、意を
用いれく、爆業を巧み、行ん、道に

流へる風状の峭壁と斧を以て割り
えんこも鹿画をみるある岩屋め
跡を執る時代は甚だし樹を
は一層の風攻を増えん此を眼下の波打
そのしむまの田の開けたる意は
跡を松のまゝに茅庵ありて一
一丈の茅庵を波清く後を云
とて行けは元深の懸る所を
築す又一幅横枝中一無つ
えんこも更なる行けは多
此地を引くす由終極の逸村を

死の
死に功州部跡に出づ、逸村を
ともしうも築きまんなる小
つあるをえんこも引くす由
くまの連ん父祖傳の土を
民の退却する所と知る例
土の住民は其の昔の族の
あてにともも備地、漸次
と同じく人なるる余人も
美村 (Buenos Village) の
美村の人と歎を思ふも
大正四年一月七日朝記す

○まのひびに属しな形象干支印出来極海
まひまひまひ漢の十二肖鏡らも様うとく
とけり係し自入の奴しと外んなるまんの
たうと字ゆめく画のこととく何とらうと先と



えりてむるののせきし

○る應臨三跡同をの之形を故りんとん
表干のまをけりたる返けりしと自印教
野と、いゝものるを氣の利きたるヤの
世をましとこのをけり、朝露の
命を刻して皆三跡の和印殊に各
野に刻るは款あり、所ありし詞えは
正に符紙をゆふね海ほしと申すは
いゝおののりしと申す石文とある
に、おののりしと申す

(二月七日の日記)

石印大角

松華涼

鶴田

東壽山

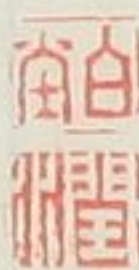
三夏の壽山
無証



壽山と並



壽山と白



子母中二石

鶴田の上石也

若くは石印大角
皆と仕上りやえ
○点の意おも
石印大角

石印大角
見りしえ
石印大角

石印大角
見りしえ
石印大角

石印大角

